

## 解 答

□

1 こと 2 ほっき 3 がんちく 4 ざっとう 5 ひそ（む）

□

1 招待 2 授 3 祝賀 4 度胸 5 歓心

□

1 エ 2 エ 3 オ 4 イ 5 ア

□

問一 不明 問二 甲 ウ 乙 イ 問三 不明

問四 ア 問五 お師匠さんのやるとおりを繰り返して、その型を覚えること

問六 自由とか独創などを主張〔すること〕

問七 定められた形式

問八 エ 問九 オ・カ

□

問一 (1) エ (2) ア (3) イ (4) オ (5) ウ 問二 ウ

問三 ア 問四 駄目になる

問五 くすぶった天井の下

問六 草履屋から逃げて来た〔こと〕

問七 ぬいが立派な成人の男で啞の人にどう接していいかわからず、家までの道で二人が黙りこくって気まづくなることをさせられたから。

問八 エ 問九 ア・オ

## 解 説

□

- 1 「…を異にする」は「…がちがっている」という意味。
- 2 「一念発起する」は「あることをなしとげようと、強い決心をする」という意味。
- 3 「含蓄」は「表面にあらわれない深い意味や味わい」という意味。
- 4 「雑踏」は「人ごみ」という意味。 5 「潜む」は「かくれる」という意味。

□

- 1 「招待」は「客としてまねき、もてなす」という意味。
- 2 「授ける」は「(目上の者が) 大切なものを与える」という意味。
- 3 「祝賀」は「喜び祝うこと」という意味。
- 4 「度胸」は「少しのことにも動じない心」という意味。
- 5 「歓心を買う」は「気に入られようと努める」という意味。

□

- 1 アは「たづな」、イは「たつきゅう」、ウは「ていき」、エは「ちすい」、オは「さはんじ」。五十音順に並べる。
- 2 ア『源氏物語』は平安時代、イ『新古今和歌集』は鎌倉時代、ウ『坊っちゃん』は明治時代、エ『奥の細道』は江戸時代、オ『万葉集』は奈良時代の作品。
- 3 ア「端午の節句」は五月五日、イ「重陽の節句」は九月九日、ウ「桃の節句」は三月三日、エ「正月」は一月一日、オ「七夕」は七月七日。
- 4 ア「還暦」は数え年の六十一歳、イ「古稀」は七十歳、ウ「志学」は十五歳、エ「米寿」は八十八歳、オ「不惑」は四十歳の別称。
- 5 ア「葉」は十二画、イ「帯」は十画、ウ「疑」は十四画、エ「協」は八画、オ「衣」は六画。

□

問一～問三 空欄・~~~~線・「▼」印の位置が不明。

問四 「これ」は、Kという画家が、絵の制作をしなければならないから、貸した画集をかえしてほしいと「ある人」に催促したことを指している。他人の作品を参考に絵の制作をしていると思える、芸術家としてあってはならない発言にあきれて笑ってしまったのである。

問五 二つ前の形式段落に、「芸ごと」には、「何々流の開祖、家元というのがあって、だれでもがそれと同じ型をまねて、その芸風が師匠に近くなればなるほど上達」とあり、その「遺風が典型的に保たれている…芸能の世界」で

は、「お師匠さんのやるとおりを繰り返して、その型を覚えることがたてまえ」であると述べられている。

問六 「おのれを貫きとおしたい人は、その流儀（＝お師匠さんのやるとおりを繰り返して、その型を覚えることが第一で、それから少しもはずれることをしない芸能の世界の流儀）をはなれるほかはない」わけだから、「おのれを貫きとおすこと」は、お師匠さんの真似でない、自分独自のやり方を追求することにつながる。それと同じ意味内容の言葉を探していくと、一つ後の形式段落に「自由とか独創などを主張（すること）」が見つかる。

問七 「ギリギリまで固定した型」が厳しく守られ、形式化された芸ごとの世界の流派では、独自性を出すと排撃される、とあることから、芸ごとの世界において守られている、「形式化され、固定した型」と同じ意味内容の表現を探せばよい。すると、八つ前の形式段落に「定められた形式」が見つかる。

問八 芸ごとでは、独自性を出して固定した型から少しでもはずれると邪道と呼ばれる、ということが一つ前の段落に述べられている。ところが、同じ形式段落に、芸術は、古い型（＝固定した型）を否定して新しい型を創りだしていくことが本質であるとのことから、邪道とののしられることがすなわち正道（＝正しいやり方）というわけである。「既存の」とは「すでにある」という意味。「かなう」とは、「合う、適合する」という意味。したがって、エが正解になる。

問九 芸ごとの世界では、「何々流の開祖、家元というのがあって、だれでもがそれと同じ型をまねて（＝模倣して）、その芸風が師匠に近くなればなるほど上達です」とあり、さらに、「封建的な制度（＝芸ごとの世界の家元制度）に窒息させられ、ギリギリ縛りつけられて身動きがとれない、こんな土台からは、これからの芸術的発展（＝新たな価値観の創造）などは、ぜったいに望めません」とあるので、オが選べる。「古い型を否定して、新しい…ものを創りだしてゆくのが芸術の本質」とあるから、芸術作品の本質的な（＝最も大切な）部分は、創造的な部分であり、それを見いだせないなら、芸術作品の的確な批評はできないことがわかる。よって、力が選べる。

## 五

問一 (1) ぬいは母親に柱時計の音を聴かせようとしているのだから、エの「カチカチ」が合う。(2) 柱時計のぜんまいを巻く音を表す言葉が入るので、アの「ギギギギ」が合う。(3) 指で手真似（＝手で物の様子などを表すこと）をする様子を表す言葉が入るので、イの「ちょいちょい」が合う。(4) ぬいがかけ（＝走り）出したときの音を表す言葉が入るので、オの「ぱたぱた」が合う。(5) 清二は、ぬいが出して来た椿油が、故障した柱時計を修理するために自分が求めていたものだったので、うなずいたのである。よって、ウの「うんうん」が合う。

問二 ぬいは「清二のように評判の利口者で…立派な大人の男で、しかも啞の人に、どんなふうにしていいのかいつも困る」ので、清二の家まで迎えに行くことに気がすまなかったのである。よって、ウが合う。

問三 すぐ後でぬいが「だって母さん、耳についちまっているからわかんなかったのさ」と言っていることから、母親は「若いくせにさ、おまえ（はなぜ柱時計がとまっていることがわからなかったのか）」と聞いていることがわかる。「若いくせに」は、「若くて自分よりは耳がよく聞こえるくせに」という意味ととらえると、イやオは不適当だとわかる。よって、アが合う。

問四 「ばけた」は、柱時計が正常に動かなくなったことを指している。少し後で母親が、柱時計について「そういきなり駄目になるこってない」と言っている。ここでの「駄目になる」は「正常に動かなくなる」という意味である。

問五 「二十年もこわれずにどこに掛かっていた時計か」と考えて、傍線部より前を中心にさがせばよい。前には適当なものがないが、清二が柱時計を修理し終えた場面に「再び、古風な柱時計がくすぶった天井の下で、活発にチクタクいいだした」とあるので、柱時計は「くすぶった天井の下」に掛かっていたことがわかる。

問六 少し後に、「ぬいは、彼（＝清二）がこの春、草履屋から逃げて来た」ときの話を聞いた…彼（＝清二）が涙をこぼして頼んだのでやっと家にいいことになった」とある。清二は草履屋に働きに出たが、草履屋の主人に冷たくあつかわれるのがつらかったため、草履屋を出て、再び家にもどってきたのである。「草履屋から逃げて来た」ことが家にいるきっかけとなった出来事である。

問七 傍線部の直後から、ぬいの清二に対する思いが述べられている。ぬいは草履屋から逃げて来なければならなかった清二を気の毒に思っているが、清二が耳が聞こえないために、そのことを告げることができない。そのため、「黙りこくって清二と家まで歩いて来なければならなかったら、どんなにぐあいわるかっただろう」と思っている。清二と一緒に来なかったので、「家までの道で、黙りこくってぐあいが悪くなる」のをさけられたので、ほっとしたわけである。さらに、普段から、「清二のように…利口者で…立派な大人の男で、しかも啞の人に、どんなふうにしていいのかいつも困るのであった」とあるところもあわせてまとめる。

問八 冒頭部に「杏の若葉越しに、薄暗い土間にまで日のさし込む静かな午後であった」とあることから、季節感を表しているとともに、「若葉」という言葉で、若いぬいが、とまどうことがありながらも、自分を変えていく可能性を持っていることを暗示している。

問九 ぬいは、草履屋から逃げて来なければならなかった清二に対し、『ほんとうにお気の毒だと思ってよ』と言わずには気のすまない心持ちになったが、柱時計を修理してもらった後には、『清サンハ、ホントニ、キカイノコトガ、オ上手デス』と清二に対して尊敬の念を抱いている。よって、アが合う。また、「清二のように…啞の人に、どんなふうにしていいのかいつも困るのであった」とあるので、ぬいは清二とのコミュニケーション（＝意思の伝達）がうまくとれないことに困惑していたが、清二とともに柱時計の修理をする中で、清二の動作を見て、彼が柱

時計の修理のために要求している物を当てたり、灰に文字を書いて積極的に清二とコミュニケーションをとったりするようになっている。このことから、オが合う。